

現実を受け入れて 最善を目指す

ルダシングワ真美さん(57)と夫ガテラさん(65)は、ルワンダを拠点に、のべ1万人以上の義肢装具・杖・車いすなどを無償提供してきた。その活動の拠点がルワンダ政府によって突然壊されたのは、今年2月のことだ。

二人は政府から寄贈された土地に、約20年かけて義肢製作所や活動資金を得るためのレストラン、ゲストハウスなどを建て、現地で義肢装具士も育成するなど活動が続けていた。ただ、この地域はたびたび洪水の被害を受けていて、数日中に再び大雨の予報が出たため、立ち退きを命じられた。「すぐには無理だ」と断ると、翌日にはシヨベルカーがやってきたのだ。

「荷物をどこに運びますか、そのためのトラックをどこから手配し、運ぶ人を何人雇おうか……。やらなくてはいけないことが頭に浮かび、動くしかない状況で、悲観する暇はありませんでした。もし動かずにいたら

ますます不安は大きくなり、次に立ち上がる時にかなりエネルギーが必要だったでしょう」
強制撤去の翌月、義肢製作所の再建資金を集めるために、日本に一時帰国した。だが、予定していた約100件の講演やイベントは、新型コロナウイルスの影響で次々に中止になった。新型コロナウイルスや相次ぐ自然災害で、経済的に厳しい人も増えた中で、「支援して」とは言いづらかった。それでもこの期間、落ち込んだり泣いたりすることは一度もなかったという。

「起こったことは、わりとそのまま受け入れるタイプです」



義肢装具士
ルダシングワ
真美さん(57)

神奈川県出身。1997年
に夫ガテラさんとNGO
「ムリンディ・ジャバン
・ワンラブ・プロジェクト」を設立

起こったことは起こったこと。現実に対して、はたから見ればある種「諦観」するようになった原点は、中学2年のときの母の死ではないかと自己分析する。母にがんが見つかったときには手遅れの状態で、死後は、日々の食事作りや買い物など家事全般は真美さんが担当。自分の時間はほとんどなかった。

「嘆いても過去が変えられるわけじゃないし、受け止めた上で最善の方策を考えるほうがいい」

ルワンダでは、予想外のトラブルは日常茶飯事だったが、「彼らなりの事情がある」と思うと、それほどストレスにならなかった。日本での緊急事態宣言期間に、家族が家にいることをストレスに感じている人が多いというニュースを見て「先進国の人間は弱い」と感じた。

「26年前に大虐殺があったルワンダで、悲劇から立ち直ろうと必死に、したたかに生きている人たちを見てきましたから」

ルワンダに戻った真美さんは、10月中旬、義足や義手を必要としている障害者たちのために、拠点の再建が必要だと再確認し、まず600万円を目標に、クラウドファンディングを始めた。

「ルワンダには虐殺に巻き込まれて手足を失った人がたくさんいます。彼らと共に、前に進んでいきたい」